



囲炉裏から流れる薄明かりを囲みながら、異様な姿の者達が話している。

「そんなもの、何十年も昔の話じゃねえかあ。今の時代にゃ到底そぐわね。わざわざ村の外から人間を呼んでやるっていうのは……」

人間サイズの巨大な三毛猫の言葉を、向かい側にいたヒョウが「黙らんか！」と遮った。

「何が今の時代か！ 何が外か！ おめえはこの村より都会、外が大事ってえか！？」

怒声こそ迫真に満ちているが、ぼんやりとした火に照らされたそのぬいぐるみ表情は、愛嬌たっぷり笑っていた。

「着次郎どんの言うとおりに！ 村の存続の為にゃあ伝統の存続、不可欠不可避であるっちゅうのが何故分からん！」

隣にいたニホンザルが、ヒョウに雷同した。それにつられて周辺の可愛らしい動物達も「そうじゃ！」「その通り！」と次々賛同の言葉を口に出す。

「わ、わかってくだせえ！」

追いつめられた三毛猫は、輪から離れた暗がり座っていた影に救いの声を求めたが、それはあっさりと裏切られた。

「五十年に一度のしきたり、行わぬ理由など一切無し」

「そ、そんな……！」

にこやかな微笑みを浮かべながら絶望する三毛猫に、影は冷徹な言葉を投げかける。

「それに従わぬ者、皆死罪なり」

ヒイツと叫び声を挙げ三毛猫はその場から逃げようとしたが、背後から伸びたふわふわの肉球によって身動きを封じられてしまった。

「皆狂ってる、狂ってるんじゃあ……ぐぶっ」

黒く錆びた山刀によってその腹を裂かれ、三毛猫は不健康そうなどす黒い血をおびただしくその場に垂れ流しながら微笑みとともに絶命した。

その様子を見て、彼を殺めた張本人は何とも愉快そうに言った。

「また着ぐるみ汚しちまったぜ。代わり作ってくれよな」

少女の右手を、太く大きいピンク色の腕が突然掴んだ。ごわごわした毛に包まれて、不気味なまでになま暖かい。

怯えた顔をして、少女は恐る恐る見上げる。

無表情なうさぎの大きな顔が、じっと自分を見つめていた。必死に引き剥がそうとするが、その力は強く、全く敵わない。

もがくような抵抗を弄ぶようにいなし、とうとううさぎは彼女の服に手をかけ――

車の振動で、南は目が覚めた。天然ブナの間隙から洩れる雪解けの柔らかな日差しが顔をくすぐる。

「どうしたの、南？ すっごい汗」

隣に座っていた華原美佳が声を掛けてくる。

「いえ、大丈夫です。ちょっと悪い夢見ちゃって」

「そりゃそうだ、今にも吐きそうな奴がいるんだからよ。俺だって気持ち悪いや」

後ろに座っていた大野田健吾が毒づく。その体育会系的ながたいのよさからは意外な程に陰険な表情を、隣に座っている相田貢に向けていた。

「ご、ご、ごめんなさい、み、皆さん。 ぜ、ぜ、絶対、吐きません……うぶっ」

海外メーカー製の4WDワゴンで行く未舗装の林道は、虚弱体質な彼には相当堪えているのであろう、幽霊かと思間違えてしまう程に、その顔は蒼白していた。

「きめえなおい！ 吐くなよコラ！」

パシッと頭を叩かれ、貢は頬をハムスターのように膨らませた。今にも食道から内容物を吐き出しそうだ。

「ねえ見てあの看板！ アンタにそっくり！」

美佳が大げさに笑いながら、窓の外の看板を指さす。あちこちペンキ剥げした白い看板には、なんとも不細工な生き物が書かれていた。ネズミを模した人気キャラクターを描いたつもりなのだろうが、上手く描かれているとはお世辞にも言い難い。

輪郭が無駄に大きい癖に、手足はヒョロヒョロで、バランスの悪さが不気味だ。

これに底の深い眼鏡をかければ、貢そのものである。

「ぎゃはははは！ そっくりきもいー！」

「本当だ！ きめえや！ わはは」

「や、やめてください……」

騒ぐ二人を、南は遠目で見ている。正直、この二人の非常識な行動には、ついていけないと思っている。それに今は、気分が悪い。

「こらお前等、仲良くせんと今からでも引き返すぞ！」

運転席でハンドルを握りながら、縫原猛が言った。一応は学者であるが、いかにも健康的な浅黒い肌と、民俗学のフィールドワークで鍛えられたその身体は、健吾のそれとは違って妙な肉の張りがなく、爽やかな雰囲気漂わせている。

「でも先生、今から行くトコってさ、ホントに面白いトコなの？ つまんないトコだったら家に電話して車来てもらって帰るからね！」

「け、け、携帯はつ、通じません」

「トロマは黙っててよ、先生に言ってんの」

「その心配はないよ、部長。故郷の人間として、他に二つとない”奇村”であることを保証するよ」

「先生、そろそろ教えてくれよ、どういう場所に行くのかったのよお」

「だーめ、もうちょっと待ちな。民俗学サークル部員として、未知の驚きと神秘を最大限に楽しみな」

「あの、その村って、怖い場所とかあるんですか……？」

心配そうな南の言葉に、美佳が笑う。

「やだもう南ったら、大学生でしょ！？」

「大丈夫だよ吉川、怖いどころか、可愛いぞ」

「可愛い……？」

「牧場でもあるの？ でもアタシ、そういう場所やだなあ。臭いし、お肉嫌いだし」

「俺も美佳さんと同じく嫌いだ。先生、つまんねえ村だったら二人で帰るぜ」

健吾の唐突な言葉に、美佳がツっこんだ。

「どういう意味よ、二人って？」

「いや、それは……」

「あーだこーだ言うなっば。あんなものはここでしか見られないんだよ。まあ、楽しみにしててくれ」

猛の明るい言葉を以てしても、南の一抹の不安はぬぐい去ることができなかった。

なんだろう、この心の奥底からせり上がってくるような、おぞましくて執念深い悪念は……。

「み、み、南さん、だ、だ、大丈夫ですか……」

後の席から、今にも死んでしまいそうな声で貢が気を配る。南は笑顔を作ってそれに応えた。

「大丈夫です、ちょっと酔っちゃっただけで……」

「み、み、南さんも……？」

「ええ、あんまり好きじゃないんです、車。お仲間ですね」

「あ、あはは、なんか、嬉しいなあ」

「あんたとは違うわよお！ バッカねえ！」

「きめえこと言ってんじゃねえよ！」

二人が大声で会話を切ったため、結局南は一人でこの不安を紛らわさなければならなかった。大自然に囲まれた素朴な田舎の村を見れば、幾分か心は休まるだろう。そう、彼女は考えていたのだが……。

長い長い山道を走り続け、大岡大学民俗学サークルの面々を載せた車は目的地に着いた。

「さあ、ここが包（つつみ）村。俺の故郷だ」

北関東の雄大な山々の強烈な絶壁に隔たられ、埋もれているも同然なこの村は意外と広く、田畑と小川、そして年代を感じさせる幾つかの建物が、山に閉ざされた土地にへばりつくように存在している。これだけなら日本各地、どこの山里とも変わりはないかもしれない。

「先生！ ペンギンが歩いてるわ！ ペンギンペンギン！！」

窓からこの田舎の風景に似合わぬ金髪を覗かせながら、桐原美佳がけたたましく叫ぶ。

実際その視線の先には、桶を片手に野道を歩く、巨大なペンギンがいた。正確には、本物のペンギンではない。

丸っこく、そして可愛らしくデフォルメされたペンギンの着ぐるみを着た村人である。美佳の黄色い声に後ろを振り向くと、そのペンギンは愛想よく手を振り返して答えた。

「いやーん、かわいい！」

「中身はじいさんだぞ。作造って言うともうすぐ70になる」

「ゲッ……！」

猛に突っ込まれ、美佳は舌を出して大げさに顔を歪めた。この村の人間は、皆着ぐるみを着て生活しているのだ。

田圃の横の丁度いい大きさの場所に止め、一行は車を降りた。

「うわ、あそこにもいやがる！」

水車小屋の側で世間話をしている日本猿とニワトリに、健吾が大げさに驚いた。



「ありゃあ村役場の松美さんに重虎さんだなあ。もうすぐ80にもなろうに、元気なこった」

「80であんな着ぐるみを！？　すげえなあ……」

二匹の着ぐるみに声を掛けながら、健吾は両手を突き出して、だらんと前に下げた。すると、二匹は全く動作でそれに応えた。

「これはこの村独特の挨拶でね」

すっかり驚いている健吾の腕の側を、ぱんぱんに腫れた袋がかすった。

「貢！　気をつけやがれ！　ばっちいだろうが！」

青い顔をしてふらつきながら後部座席から出てきた貢に、健吾は怒鳴った。貢は曲がりくねった山道にとうとう耐えられず、酔い止めを飲んだにも関わらず気分が悪くなり、弁当ついでに買ったおにぎりの入ったコンビニ袋に吐いてしまったのだ。おかげで車内には酸っぱい臭いが漂い、何とも言えないムードになってしまっていたが、目的地の到着によって更なるトラブルからは救われた形となった。

「先生、これどうすれば……」

貢がゲロ袋を見せるように掲げる。それを見て美佳がひいっ！と声を上げ、すごい勢いで後ろずさった。

「破けたらどうすんのさ！　少しは考えなさいよトロマ！」

「す、すみません美佳さん……」

「トロマ」とは貢のあだ名である。日頃の行動が「トロくてマヌケ」であることから名付けられた。一応、健吾達とは同じサークルに属しているが、その性格からいつも下に見られている。

「まあまあ、相田も悪気があったわけじゃないんだし……あれ？ 吉川は？」

酔いが残った青い顔で貢が車内を振り返る。後部座席の隅っこで、南が何かに怯えるようにして震えていた。

「まさか、く、車、酔っちゃったんですか？」

「おめえのゲロがくせえからだろうが！」

皆が口々に勝手な推測を言い合う中、南は一步ずつ、震えながら車から降りた。

「いえ、違うんです……。ただ寒いだけ……。ごめんなさい」

「おい吉川、大丈夫か？」

「だいじょうぶ、です……」

その時、彼らの側の繁みが突如ガサガサと音を立て揺れはじめた。

「ひ、ひい！？」

「な、なんだあ！？」

健吾はとっさに美佳をかばうような体勢をとったが、当の美佳はさして危機感を覚えていなかった。

やがて、繁みの中から現れたそれは、何とも奇妙な物体だった。

「ひひひ、ひいー！」

「なんだこりゃあ！？」

成人男性が両手を広げたぐらいの、大きなしわくちの真っ赤な顔から直接、両手足が伸びた異様な着ぐるみが姿を現したのだ。

貢と健吾は突然のことにア然としており、美佳は極めて脳天気ギャハハと笑った。

「ちょっ何こいつ！ へんなのー！ まんじゅうのお化け！？」

彼女の言葉に、「まんじゅうのお化け」は皺枯れたような老婆の声で返答した。

「これはとんがらし大王と言ってな、江戸時代のとんがらし商人が宣伝のために作らせたもんじゃ」

先ほどから笑いをこらえていた猛が、ようやく彼女について紹介をはじめた。

「この人は縫原栄。この村の村長で、俺のばあちゃんさ」

「何だよもう！ 先生も人が悪いぜ！」

「そ、そ、そうですよ。ねえ、南さん……南さん？」

南は顔を青くし、啞然としたまま一言も口に出さなかったが、やがてその場にへなへなと崩れ落ちてしまった。

「いやいや、すまんのお。都会で流行ってるらしい”さぷらいず”っちゅうもんをやってみたんやが、驚かせすぎたかのお」

村で最も大きな畑を持つ栄の屋敷に通された一行は、客間にて村名物の胡麻茶を振る舞われながら、栄の話聞くことになった。

先ほど失神寸前の状態に陥った南は、別の部屋で寝かせようという猛の言葉に対して「もう大丈夫です、ただの立ちくらみだから」とそれを断り、他三人と同じく座布団の上に座っている。

「ばあさん。あんた夏でもその格好なのか？」

ぶっきらぼうな口調で健吾が尋ねた。

「その着ぐるみ、重くないの？」

続けて美佳も質問を投げる。きっちり正座をしている貢や南とは対照的に、その姿勢はかなり崩れていた。

先ほどまで身につけていた「とんがらし大王」の着ぐるみはもう脱いで、部屋の端に置かれていた

。本来の栄の姿は一見、やや腰が曲がり気味のどこにでもいるような老婆だが、眼差しをよくよく見ると、年齢にそぐわないエネルギー感が感じられる。

「なあに、これは冬用じゃ。外から持ってきた”ふりいす”っちゅうのを入れとるから、あったかいんやよお。ちゃあんと夏には夏の涼しい着ぐるみがあるよってに。それに、ギジツなんかも進歩しやるから、意外と軽いんやよお」

そう言われて気になったのか、美佳はどでかいとんがらし大王の頭に近づき、両手で持ち上げてみた。

すると、身体を兼ねたその奇面は外見からは想像できぬぐらいふわりと持ち上がった。

「うわ！ 本当だ！ ふわふわで軽い！ アタシも着てみたいなあ」

「よしよし、またええ着ぐるみを着せてやるよお」

「本当！？ やったあ！」

独特の間延びした訛と愛想のよい微笑みを交え、栄は更に語る。

「やっぱりあれかね。民俗学目指すっちゅうことは、こっちいの猛みたいに、皆先生になるんかね。偉いのお」

「別にい」

ぶっきらぼうな言い方で美佳が答える。

「ただアタシってちょっと自分の力と時間を持って余してるっていうかあ、トリビアを身につけたかったのね。んでやってみたら以外と楽しかったからさあ、居てるってだけでえ、そういうのは成るように成ればいいって感じかな？」

「つ、つまり何も考えてないってことですか？」

まだ顔色の戻らない貢が、 unnecessaryな言葉を吐く。当然の如く、健吾はそれにキツイ反応を見せた。

「何だお前、美佳ちゃんがアホだって言いてえのか？」

酸っぱい臭いが漂うのも構わず、彼は怯える貢の不格好に長い鼻っ柱にあわやぶつからんとするぐらいまで自身のでかい顔を近づけ、すごんだ。

「ち、違います。こ、言葉のあやなんです」

「びくびくせずハッキリ言えやゲロ男よお」

「おい、やめろ！ なんだこんな所に来てまで！」

猛が間に入り、生徒二人の諍いを止めた。

猛は祖母に、この村の起源についての話をしてくれるよう促した。

先ほどの出来事にも関わらず、栄はにんまりと笑顔を浮かべて語り始めた。

「元々この村ってえのは、徳川の将軍様の頃、ええと、ちょうど、家治様の御時世の頃にできたんよお」

それまで各地を放浪していた、とある職人集団が定住したのが、この地の始まりであるという。

その職人というのは、着ぐるみにまつわる仕事を専門とした者達である。

着ぐるみを作る人間、着ぐるみを着て行う仕事をする人間が、一カ所に集ったのだ。

「そ、それはせ、先生が以前話してくれた、ど、泥棒集落のようなものですか……？」

「トロマ！ あんた失礼でしょ？ まるでこの村の人達が泥棒と同じみたいな言い方じゃないの！」

「そうだ！ 美佳さんに謝れよ！」

「ひいっ！？ ご、ごめんなさい！」

美佳と健吾、貢のやりとりを見て、「いやいや若者は元気じゃらこって」と、栄が声をあげて笑う。

「でもよ、江戸時代に着ぐるみって何か場違いな感じがするなあ」

「それがね、着ぐるみってというのはそれより遙か以前からあったんだ。でも本格的に盛り上がったのは江戸時代ってわけ。ばあちゃん、ちょっとあれ見せてくれ」

あいよ、と栄は側に置かれていた古い絵巻物を見せてくれた。

それは江戸時代の一般的な商店の周りを描いたものであったが、行き交う町人に混じって何やら人の足が生えた蛸のような生き物があるのに、一同注目した。

「蛸！？ 蛸の着ぐるみなんてあったのかよ」

「ああよ、元は歌舞伎の演目なんかで使うもんやったんが、商人が我が店の宣伝になると言ってな。ほら、都会じゃ今でも町中で着ぐるみがティッシュとかくばっとるんじやろう」

「お、お、おばあさん、と、都会のことなのによくご存じですね」

「この村のもんは着ぐるみを使った仕事だったら全国津々浦々、何でもやりおる。村にいるのはわしらみたいな年寄りだけやが、若いもんは蝦夷から琉球まで、色んなところにおるんよ」

「今でいう派遣みたいな感じ？」

「まあ近いっちゃ近いなあ。

違うのは、雇われてからどっかに行くわけじゃない、

ってことかな」

「ど、どういうことです？」

「この村にいる人間は、皆血が繋がっているんだ。俺や祖母ちゃん、村の皆、村の外にいる若い連中、みんな家族みたいなもんなのさ。自ずから、家族のために働いて金を稼ぐ、当然っちゃ当然だろ？」

彼らは当時における様々な集団の中でも、極めて弱い存在であった。そこで互いの不利益を相互に補い合うべく、彼らは集い、ともに協力し合うようになったのだ。そうして自然と拠点、いわゆる「着ぐるみ村」的なものを作り上げ、そこに住み着くようになる。



商家、見せ物小屋、主にそうした顧客先に派遣され、一時的に仕事が無くなればこの村へと戻り、仲間と情報交換をしたり、残してきた家族とつかの間の団らんを楽しんだりしていた。このようにして、着ぐるみ職人達の稼ぎによって村は維持され、今日まで伝統を守り続けることができたのだ。

その結果として、彼ら同士の繋がりは強固なものになった。

「ついさっき俺がやったこの挨拶、覚えているか？」

そう言って猛は、先ほど着ぐるみの村人に対して行ったポーズを再びとった。

「これはな、同じ村の出身であることの証明も含まれているんだ。例えその身体は着ぐるみに包まれていても、その中には魂が入っている。それが分かるってことは、同じ魂を持った人間だってことさ」

「なんかかっこういいなあ、それ」

例え遠く離れた地であっても、同村の者がいれば分け隔てなく助け合う、それがこの村の流儀である。栄は自身の孫の説明を聞いて、うんうんと深く頷いた。

「猛坊も立派になったもんやあ。昔はろくに物の数え方も知らなかったのになあ」

栄の茶々に対して、猛は照れくさそうにコホンと咳をした後で、再び説明をはじめた。

「それでね、最近を着ぐるみ稼業も苦しくてな」

「そりゃあ、着ぐるみのバイトなんて皆やれるもんね。アタシもやったことあるしい」

「桐原、お前バイトしたことあったのか？」

「やだわ先生、アタシだってバイトぐらいしたことあるわよ。メンドいから一日でやめたけどねー」

「……まあ、そうだな。アルバイトとかで競争相手が増えて、村の人間が就けるだけのパイが減ったんだ。俺みたいにあまり関係のない仕事に就く奴も少なくない。だがそれでも、伝統ある着ぐるみ業を続ける仲間達のことは陰ながら支援させてもらってるよ」

「先生、カッコいい！」

「当然のことさ。それが出来ないヤツは、キブクレだよ」

「キブクレ？」

「ああ、お前等の言う”着膨れ”とは少し意味が違うか。後で教えてやるよ」

「でで、でも、そんな歴史が日本にあったんですね。ぼ、ぼく、知らなかったです」

「どうだ、いい勉強になっただろ？ 一流の大学でも滅多に来れないフィールドワークだぜ」

自信ありげに猛が語る一方で、南はうかない顔をしていた。先ほどよりも顔色が悪く、額からは冷や汗すら流れている。

「ど、どうしたんです？ 南さん」

「お前が気持ち悪いんだって言ってんだろうが」

「おい吉川、体調が悪いのか」

だがその様子はよく見ると、何かに怯えているようであった。

「ごめんなさい、外出てもいいですか……？」

南は、申し訳なさそうに家の外へと出て行った。

家の裏手で、南は息を荒くしてうなだれている。

「み、南さん……」

後からついてきた貢、そして猛が気遣うように声をかけた。

「どうする？ 一足先に宿泊場所に行って休むか？」

「あの、体調は悪くないんです。でも私、着ぐるみが……」

「着ぐるみ？」

「怖いんです……昔のことが原因で」

南は震える手を押さえながら、ぽつりぽつりと語り始めた。

彼女が5歳の頃の誕生日、両親が新しくできた遊園地へと連れて行ってくれた。前々から行きたかった場所、はしゃぎ回ってうっかり両親とはぐれてしまった。

どこかも分からぬ広い園内で一人泣いていると、その遊園地のマスコットを模した着ぐるみが近づいて、優しくその手を取った。

「お父さんとお母さんのところへ案内してくれるんだ！」

彼女はそう思って、人形に手を引かれるまま歩いていった。だが、不思議なことに、着ぐるみはなるべく人気のない場所を歩きたがる。徐々に彼女も不安になってきた。

かれこれ20分ほど歩いた頃、着ぐるみがトイレを指さした。日は暮れ始め、近くにアトラクションもない場所に人がいない。

抵抗むなしくものすごい力で身体を抱き抱えられ、無理矢理中へ連れ込まれようとしたその時、偶々そこを通りがかった警備員が駆けつけた。着ぐるみは南を投げ捨て、慌てて逃げていった。

幸いにして彼女は無事な状態で発見されたが、そのまま誰にも助けられなかったらどうなっていたか、幼心にもなんとなく理解できた。

以来、南は着ぐるみに対してトラウマを抱き、遊園地やデパートのイベント会場などは、なるべく避けるようにして生きてきた。だが今回、猛は行き先の詳細を秘密にしてサークルの皆を驚かせようと考えていた。南もまさか、自分が最も苦手とするものが多数存在する場所へと連れて行かれるとは思わなかったのだろう。

「そうか、俺が余計なことしたせいで……。ごめんな」

「いえ、先生のせいじゃないです。元はと言えば、私のこの恐怖症がおかしいんですよ、だから気にしないで下さい」

「ともかく、落ち着いた方がいいよ。とりあえず宿に連れて行くから、今日はそこで休んでろ、いいな」

「……すいません」

「ぼ、僕も行きます。南さんが心配です」

「お前、健吾達と一緒にいたら苛められるもんな」

「そ、そんな理由じゃないですよ！」

「ははは、分かってるよ。一緒に行こう」

こうして三人が一足早く宿泊先に向かった。

残された二人、健吾と美佳は猛から宿泊先の場所を聞かされ、一通り見学を終えた後で来るように言われ、適当に村をぶらついていてた。この村の人間は、一人違わず着ぐるみを身につけている。道行く度にすれ違う、デフォルメされたライオンやゴリラに最初こそ胸ときめかせはしゃいでいた美佳だったが、やがて自身の性格から来る飽きっぽさゆえ、不機嫌になっていった。

「なんかもう疲れた、帰りたい」

「え、もうかよ美佳さん！ もうちょっと一緒にいようよ」

「だって楽しくないもーん」

健吾は困った。今が誰にも邪魔されず、愛しの美佳さんと二人っきりでいられる機会なのに、まだ一時間も経っていないじゃないか。この問題に対し、彼は実に安直で、なおかつ下品極まりない解決法を思いついた。

「ほら美佳さん、あそこに小屋があるだろ。あれ、農具とかを置く納屋だぜ」

「それがどうしたのよお」

「こんな変な村だ、きっとすっげえ変なものがあるぜ。なあ、中入って見てみようよ」

「うーん、どうしよー」

「ね、いいだろ？」

健吾は美佳の目を見つめながら、その手をそっと握る。

美佳もまんざらではなさそうな挑発的な顔を浮かべ、口元を緩めた。

「わかったわ、いいよお」

「マジ！？」

「でも、ちょっと待ってて？ ほら、靴ひもが解けちゃってえ」

「そんなことどうでもいいよ！」

「焦らないでえ。あの中で待っててえ」

ちゃんに行くから、と耳元での囁きを受け、健吾は大いに興奮し、いそいそと納屋の中へ入っていった。

その後ろ姿を見つめ、美佳はクスリと嘲るように吹き出した。あいつのことなんて、何とも思っていない。ちょっと可愛い子ぶってたらオーバーなぐらい骨を折ってくれる、ただの便利屋さん。関係を持つなんて、もってのほかだ。

パンツ一丁の健吾が期待に胸を膨らませて待っている納屋に向かってアカンベーをして、美佳はその場から離れた。気が変わった、もうちょっとブラブラしてみよっと。でもなるべく、あいつに見つからないようにしないと。まあ、そうなったらそうなったで適当に言い訳すればいいんだけどね。

しばらく歩いた所に、古びた鳥居を見つけた。その奥には少々狭いが、通り抜ける分には問題のない、木々に囲まれた道が続いている。

(面白そう)

美佳は何の疑いも持たず、その道を進んでいくことに決めた。

知らない鳥の鳴き声が響く森の中を、美佳は一人進んでいく。最初の内は面白いかもと思っていたが、歩いて歩いて同じような景色が続くばかりで、足も疲れてきた。でも、今更引き返すのも何か嫌だ、せめて何かを見つけてから帰らなきゃ損よ、そんな浅はかな考えで、見知らぬ場所を闇雲に歩き続けていたのだ。

だが、彼女の願い叶ってか、もうしばらく歩いた時、何か小屋のようなものが見えてきた。美佳の好奇心は再燃し、先ほどまでの疲れもなんのその、一気に走った。

その建物は先ほど健吾が入っていった納屋と同じぐらいの大きさだった。が、白塗りの外壁や朱色の屋根、そして入り口の前に掛けられている、くずし字で書かれた札と榊の葉で装飾された飾り物が、何やら重要な場所であることを予感させた。

「……覗くだけならいいわよね、ちょっとだけえ」

閉まっていたら帰ろうと思って引き戸に手をかけると、思ったより簡単に開いた。そっと中に足を踏み入れる。真っ暗で何も見えなかったが、側にあったスイッチを入れると、オレンジ色の豆電球が点灯した。

そこら中に、たくさんの着ぐるみが乱雑に放置されていた。馬や虎など、一目でモチーフが分かるものもあれば、まるで妖怪のようなおどろおどろしい造形のものまであらゆる着ぐるみが集められていた。



その中に、一つ妙なものがあつた。ぶち柄をした、犬の着ぐるみ。他の着ぐるみは力なくもたれかかるような姿勢で置かれているのに、それだけしっかりと起立した状態になっている。

「何かしら、これ……」

美佳はその着ぐるみに近づき、恐る恐る触ってみた。その瞬間、とてつもなく重大なことに気がついた。暖かい。この着ぐるみから、人のような温もりを感じる。

だがそれに気がついた時は既に手遅れだった。着ぐるみの右手が彼女の手をがっちりと掴み、残った左腕でかたくその身動きを封じてしまったからだ。

「お嬢さ〜ん、迷子かなあ？ おうちはどこかなあ？」

口を塞がれ、言葉に鳴らない叫びを上げる美佳であったが、もはや何もできなかった。そのまま着ぐるみの分厚い腕によって締め落とされ、彼女は意識を失った。

待ちぼうけを食らった健吾が、しょんぼりした気持ちを胸に宿泊場所に戻ってきたのは、辺りが薄暗くなり始めた頃だった。

宿泊場所とは言っても、このような小さな村に旅館やホテルがあるわけではない。大分昔、村民の学校として使われていた木造の小さな校舎を、宿泊施設として改修したものである。村民の寄り合い所や物置きなど、宿泊だけでなく様々な事柄に利用可能で、粗末ながら風呂場もちゃんと用意されている。

門の前で煙草を吹かしていた猛に美佳のことを聞いたが、返ってきたのは健吾自身が最も恐れる答えだった。

「桐原？ まだ帰ってないが……」

「そんな！？ んなはずねえよ！」

健吾は酷く焦り、落ち着かない調子でまくし立てた。

「こんな場所でずっと戻ってこないって、それやばいですよ！ 事故じゃないですか！」

「お前等、一緒じゃなかったのか？」

「い、いえ、途中で別れたんです……でも！ ひょっとして森の中とか入り込んで、遭難とかしてたら！」

美佳さんが危ないですよ！ いつになく必死な健吾の声を聞き、建物の中から南と貢もやってきた。

「俺、今から探しに行きます！ 美佳さん、きっと今頃泣いてますよ！」

「で、で、でも、よ、この辺りの夜はすごく暗いですよ」

貢の余計な一言に、再び健吾が怒る。

「あああ！ お前美佳さん見捨てるのかよ！ 死んでもいいっていうんかよ！」

「そ、そんなこと言ってないです……」

「じゃあどういう意味だよトロマ！ お前ちょっと勉強できるからっていつもうぜえ真似しやがって！ 美佳さんはお前のこと嫌ねえなんだよ！ だからいなくなったかもしれねえじゃねえか！ もしそうだったらお前殺すぞ！」

「落ち着け！ とりあえず落ち着け！」

怯える貢に一方的にがなり立て、つかみかかろうとする健吾を猛が必死に制止しているところへ、二体の着ぐるみがやってきた。

一人は昼間出会った縫原栄の着ている、とんがらし大王。そしてもう一体は、頭にちょこんと警察帽を乗せ、自転車を引いている、ぶち柄の犬だった。

「ちょっと聞かせてもらったけどよお、えれえことらしいなあ」

「おばあちゃん、どうしよう」

弱り顔を見せる猛とは対照的に、着ぐるみの二つの顔は可愛らしくはにかんでいた。

「なぁに、村の頼りになるもん呼んで、今から探してもらえばいいんやあ、心配すんな」

「本官が隅から隅まで搜索しますので、お任せを！」

「本当ですか！？ そりゃ有り難い」

「俺も行きますよ！ 俺のせいで美佳さんが迷子に……」

「だめじゃらあ、おっときィ」

「なんでだよ 緊急事態なんだぞ！」

いきり立つ健吾に対して、ぶち犬駐在の声は至ってとぼけていた。

「まあまあ、ここは本官にかかれば万事大丈夫――」

ぶち犬の柔らかい胸ぐらを、健吾が乱暴に掴んだ。

「ふざけんな！ 美佳さんが死んでみろ！ おまえ等村人全員訴えてやる！」

「ははは、これは困ったなあ。若者は怒りっぽいなあ」

「何だと！」

「まあまあ、とにかく落ち着いてえな」

いきり立つ健吾の肩をポンと軽く叩き、栄がやさしくなだめる。

「もしそのお嬢ちゃんが帰ってきたときに、お兄ちゃんいなかったらどうだあ？ すごく寂しがるだろお？ お兄ちゃんはお嬢ちゃんを出迎える役をやってくれ、頼むよお」

「でもよおっ！」

「健吾、おばあちゃんの言うとおりで。第一土地勘のないお前が言ったところで、ミイラ取りがミイラになるだけだ。ここは村の人達に任せてくれんか」

「……わかったよ」

健吾は俯き、しぶしぶ駐在から手を放した。

「なあに、本官がきっと見つけて見せますよ。心配ゴムヨー！ ははは！」

都会の若者による無礼を気にするそぶりもなく、犬の駐在は自転車にまたがってもこもこした足で器用にペダルを漕ぎ、去っていった。

視界が暗闇に包まれた状況の中、美佳は意識を取り戻した。ほぼ真っ暗に近いが、かろうじてぼんやりとした光が向こうに見える。どうやら、目を何かで塞がれているらしい。おまけに、手足も自由に動かさない。拘束されているのではなく、動かそうとしても力が全く入らないのだ。助けてと叫ぼうとしても、全く力が入らない。それに、背中を除く身体全体が、何か柔らかいもので包まれている。

一体、自分に何が起こったのか。しばらく考えてみて、分かったことはただ一つだけ。自分は、無理矢理着ぐるみを着せられている……？

「おまえさんは、今から神様になるんだよお」

どこかで聞き覚えのある声。

(やめて、お願いたすけて……)

助けを求める声が、全く出せない。背中に、何か熱いものが近づけられているのを感じる。

(やめて！ やめてえええ！)

それが背中に当てられた瞬間、ジュッと何かが蒸発するような音がして、激しい痛みが彼女を襲った。

(んぎiiiiiiii！)

身体全体が小刻みに痙攣する。声に出して激痛を訴えることができず、苦悶が体中を駆けめぐる。

「これからなあ、ずうっと死ぬまで、この着ぐるみと一緒になれっだ。有り難いこと、有り難いことじゃらあ」

焼けただれた背中に、何か液体のようなものが流し込まれ、それが更なる激痛を呼ぶ。

(死にたい……！　こんなに痛いなら、死なせてえ)

あまりの苦しさに全身をガクガクと震わせながら、美佳は一刻も早い苦痛からの解放を必死で望んだが、その願いは無慈悲にも退けられることになる。

真夜中、貢が宿泊部屋として使っている教室の扉がノックされた。ひょっとしたら健吾が仕返しにきたのかと、戦々恐々としつつ、扉から離れている窓から外の様子を覗いてみると……。

そこには、南の姿があった。扉の前で、申し訳なさそうに俯いている。

「み、み、南さん……」

貢の声に南は振り向き、ぺこりと一礼した。

「同じサークルなのに、あまり話したことがなかったですね……」

今は使われていない、小さな校舎の狭い運動場。その上に瞬く星空を、二人は下駄箱前の段差に腰掛け、眺めていた。

「お、お、俺、人と話すの、苦手なんで……」

「いいんですよ、アタシもあの二人に適当に合わせてるだけで、自分では何もできないし……」

「み、美佳さん、今頃どこにいるんでしょう。心配だなあ……」

「貢さん。美佳さんや健吾さんのこと、本当に心配ですか？」

「え、え、そ、それはどういう意味で？」

「……こんな時に言うのもなんですけど、あの二人、あまり好きじゃないんです。すごく偉そうで、罔々しくて、あなたのことなんて人間として扱ってないみたいで、見ているこちらが嫌になるんです」

自身でも乱暴な発言だと思ったが、構わなかった。トラウマを抉るこの包村という場所で、予期せぬトラブルの真っ直中にあることが、彼女にとって大きなストレスとなっていた。

それに加え、先ほどの健吾のあの態度が腹に据えかねていたのだ。おそらく行方知れずになったのが自分や貢であれば、健吾はあのような必死な姿勢は見せなかつたらう。下手をすると美佳と二人して、搜索を村人に任せてさっさと帰ろうなどと言い出していたかもしれない。

ついその心中を、側にいた貢に吐き出してしまった。

「で、でも、僕にかまってくれます。二人なりに、ちゃんと話しかけてきてくれます」

「だからそれは――」

「……一番ひどいのは、無視されることです」

しばらく間を置いて、貢は付け加えた。

「中学校の頃、もっとひどいイジメに遭ってました。あんなもんじゃないんです。皆何が起こっても、一言も話しかけてきてくれないんです。話をしないってことは、人間扱いしないってことなんです。あの時に比べたら……」

語る貢の目にうっすら涙が浮かぶ。その様子を見て、南は自身の発言が軽率であったことを理解した。

「……ごめんなさい。大変な事態なのに、ひどいことを言ってしまうって」



「い、い、いいんです。実際俺、ウジウジしてるから、上手く話とか進められなくて、相手をイライラさせちゃうんです。南さんみたいに、ちゃんと二人とも話できなくて……」

「無理矢理合わせてるだけです。面白い話題なんて思いつかないから、適当に相づち打ってるだけ」

「で、で、でも、すごいことだと思います。相手と向かい合えるなんて……勇気があります」

「……着ぐるみが怖いのに？」

「だ、誰にだって、こ、怖いものが一つはあります。だ、だから、元気を出して……」

「でも……」

憂かない表情を浮かべた南を貢はしばらくずっと見ていたが、やがて意を決したように言い切った。

「も、も、もし、怖かったら、自分がずっと一緒にいます！　だ、だから安心して！」

その言葉を発し終わってからしばらくして、貢は珍しく笑顔になった。少々ぎこちないが、人を安心させる柔らかな笑み。

貢の言葉に南は一瞬戸惑ったような表情を浮かべたが、すぐに安堵したように微笑んだ。

「分かりました。じゃあ、ちゃんと守って下さいね」

「も、も、勿論！」

非常にささやかではあるが、お互いこの村に来て初めて、穏やかな時間を過ごすことができた。この遣り取りを物陰から監視するものがいたことに、二人は気づくはずもなかった。

翌朝、南は健吾の怒鳴り声で目が覚めた。

「クソッ……もっとちゃんと探せや！ ふざけたぬいぐるみなんぞ着込みやがって！」

隣室からでも、その苛立ちが伝わる。部屋を出ると、ちょうど健吾も隣の教室の扉を開け、外へと出る場所であった。

「おう、ちょっと出かけてくるわ。先生達には適当に言っといてくれ」

「行くって、何処にです！」

「決まってるだろうが、美佳さんを探しに行くんだよ。やつら、まだ見つけられてないみたいだ」

「でも昨日、あんまりうろつくなって――」

「うるせえな！ 動かなきゃ美佳さんは助けられねえかもしれねえだろ！ うかうかしてて万が一美佳さんが死んじゃったら、俺、俺……」

ああくそ！ と健吾は床を踏みならした。

早朝からの騒々しい物音を聞きつけ、猛と貢も階段を上ってきた。

「先生、いいところに来てくれたよ。止めても俺、行くからな」

「わかった、行きたければ行け」

「せ、せ、先生！ でも……」

「確かに健吾の言うとおりにかもしれない。もし美佳が助かるのであれば、可能性を増やすのはいいことだ。だが健吾、決して危ない真似はするなよ」

「……分かってるよ」

猛の言葉に健吾は頷いた。そして三人に背を向け、廊下を走り去っていった。

「先生、いいんですか……？」

不安そうな南をなだめるように猛は微笑む、

「大丈夫さ。こんな小さい村、健吾みたいなガサツな奴がうろうろしてれば絶対誰かが見ていてくれるよ。なあに、皆親切な人達だから、無茶はさせないさ。それに美佳だって、あいつのことだ。またつまらん悪ふざけでもしてるに違いない。今にひょっこり出てきて、駐在にどやされるさ。それよりも勉強だぞ。この村に来る機会なんて、一生に一度あるかないかだからな」

至って呑気そうな猛とは裏腹に、南は不吉なものを感じずにはいられなかった。

健吾は鳥居のある林道へとたどり着いた。村の入り口付近まで行こうとして迷ってしまったのだが、その道中でたまたま、彼女のヘアピンが鳥居の付近に落ちているのを見つけたからだ。

前から人が来ないか、警戒しつつ進んでいく。正直言って、この村の人間は当てにならない。先生は此処の出身だからああ言うのも無理はないが、その見た目といい行動といい、胡散臭い。昨夜、美佳を捜索していると連中は言っていたが、今日自分が村を歩き回った限りでは、人捜しをしてみたって感じのヤツは一人も見当たらなかった。探す気なんて毛頭ないのか、それとも――。

白塗りの荘厳な装飾が施された建物の前まで来た時、人の気配に気づき、健吾は物陰に身を隠した。前方からやってきたのは、狸の着ぐるみであった。

建物の角までやってきた時、健吾はすかさず姿をあらわし、ひるんだ隙に相手の喉元をがっちり押さえ込んだ。こういう力仕事には自身がある。

「おい！ 美佳さんはどこだ！ 言え！」

「やめてくれ、言うから、言うから、年寄りを苛めんといてくれえ！」

愛らしい外見からは想像もつかない、皺がれた男の声。

「さっさと言え！ さもないと……」

着ぐるみの首をぐっと締め上げてやると、中身は苦しそうに呻き、必死で叫んだ。

「この先だ！ この先の拝殿に女はいる！ だから早く離してくれえ……」

健吾が食らわせた当て身によって、着ぐるみの主は気を失った。引き剥がされた被り物のその下にあったのは、齢70を越えているだろう、老いた男の頭だった。

愛らしくデフォルメされたその被り物の下には、醜い素顔が隠されていたのだ。

「うへっ、ちょっとでも可哀想と思ったのは間違いだったぜ」

気を失っている老人を茂みの中に隠し、健吾はそのまま先へ進むことにした。健吾は自分がアクション映画の主人公であるかのように思えた。幼い頃、ジェームズ・ボンドやチャールズ・ブロンソン、シルヴェスター・スタローンに憧れ、近所の年下のガキ相手にバカな映画ごっこをやって、何度も大人達から雷をくらったか分からない。

桐原美佳——最高に綺麗で、超絶魅力的な女。もし彼女を助け出すことができれば、必ず俺になびいてくれる。今までは俺が献身する側だったが、それも逆転だ。あの高嶺の花が自分にひざまづく様をその単純な脳内で想像し、健吾は興奮せずにいられなかった。

幸いにして、他の村人に遭遇することはなかった。三十分以上かけてひたすら歩いていると、辺りの状況が目に見えて変わりはじめた。樹木に混じって、やたら古びた着ぐるみが並んでいる。最初は人かと思って驚いたが、どうやら人並みの大きさをした柱に立てかけたものようだ。ライオンや熊といった馴染みのものから、江戸時代の妖怪絵巻物に描かれているような得体の知れないものまで、たくさんの着ぐるみオブジェが不気味に立ち並んでいた。

どれもがかなり年月を経ていて、愛嬌のあるはずの着ぐるみの顔は、泥や虫の死骸にまみれ、怪しくにやけているように見えた。

「おお」

急に声を掛けられ振り返ると、駐在がいた。

「こんなところで何して？」

ぶち犬の着ぐるみのせいで表情はよく読みとれないが、両手を後ろにやって首をわずかに傾けている。まずい、何とか誤魔化さなければ。

「先生達とはぐれたんだよ、随分先に行っちゃった」

「……この先に？」

「ああ、そうだ、この先。何でも、すっげえ珍しい神社があるから、見に行こうってさ」

健吾は内心焦っていた。いざとなれば、この駐在を殴り飛ばして逃げるしかない。そしてその心情は、露骨なぐらい顔に表れていた。

「そうかそうか、まあ、ゆっくり見学して行きなさいな。都会じゃあこんな珍しいものは見れないからねえ」

駐在は愛嬌たっぷりに右手を振り、来た道に戻っていった。どうもあいつは気に入らないが、去っていったのは運が良かった。健吾はこのまま探索を続けることにした。

やがて、何か祭壇のようなものが見えてきた。神社の社に近い形だが、不自然に丸みがあって、見方によっては着ぐるみ動物の頭を模したように見える。その上に、一体の着ぐるみが寝かされていた。何の動物がモチーフなのか、人目ではっきりと分かった。人間だ。幼稚園児がクレヨンで殴り書きしたような顔をした人間を立体化した着ぐるみだ。

「何だ、これは……？」

恐る恐るその人型に触れると……。

「うわっ!？」

不自然な生暖かさがあった。間違いなく、人が入っている。

「いけないなあ、不法侵入ってやつだよ？」

その声に振り向こうとした瞬間、鈍い痛みが後頭部を襲った。意識の混濁とともに身体の力が抜け、健吾はその場に崩れ落ちる。

「気絶させた人間はもっとちゃんと隠しとくもんじゃないかねえ、ちょっと脳味噌が足りないよ君」

薄れゆく意識の中、健吾の頭をよぎったのは、美しい美佳の姿だった。

肩に走った強烈な痛みによって、健吾の意識は無理矢理目覚めさせられた。何も見えない、暗闇の空間。だがそれでも、自分の両手が縄のようなものに縛られ、引っ張り上げられていること。そして今、自分の右肩に凄まじい一撃が加えられ、そこから夥しい出血が起きていることぐらいは、容易に理解することができた。

「さすがにナタで斬られちゃあ、覚めるもんも覚めるよなあ」

暗闇から、声が聞こえた。どこで聞いたか思い出せないが、こちらを不快にさせる、どこか間の抜けた調子。

さらに、もう一撃。骨が大きく揺れ、神経を激痛が蝕んでいく。あまりの苦痛に、健吾は大声を張り上げた。

「叫んだって、誰もこねえよお？　ここは屠場みたいなもんだからなあ？」

「やっ、やめ・・・やめてくれえ」

涙声で発せられる健吾の懇願も、空しく無視された。次に放たれたナタの一振りによって、健吾の逞しい右腕は、もはや弱い女性でも簡単に引きちぎれるぐらい、無惨な有様となってしまった。

「ああああああ！！」

「そんなに叫ばれてもなあ。男の声じゃあこっちもいきり立ってこねえのよ、悪いねえ」

「な、なんで・・・なななんで、こんなことを」

息も絶え絶えな男の言葉に、暗闇はハハハと陽気に笑った後、しばしの無言を間に挟んで答えた。

「おまえ、俺に無礼なマネしたろ？」

そして左腕に襲いかかる、無慈悲な刃。



先ほどよりも、重く、力が籠もっている。もはや、健吾が助かる術はない。何故、自分がこのような目に遭うのか……。そして、今自分を惨殺しようとしている声の主は誰なのか……。いずれの謎すら、彼には知る権利すら与えられなかった。

――遙か昔のことです。

村の近くにある大きな沼に、巨大な蛇が住み着きました。

村の作物や建物に危害を加えるので、人々は蛇を大変おそれました。

それでも勇気を出して、何とか余所の土地へ移ってくれないかと相談を持ちかけたところ、蛇はそれを受け入れる代わりに、ある条件を出しました。

「身の丈六尺ある大きな男女を生け贄として寄越せ」

村人達は困り果てました。この村には、そんな背の高い人間などいなかったのです。

でもこのままでは食べるものが無くなり、皆死んでしまいます。

その時、ある若い男が言いました。

「わしら夫婦が草木を編んだものを身にまとして、大きくなればいいのだ」

男は勇気は勇気がありましたが、その妻は大変な卑怯者で、夜な夜な一人で川を越えて逃げだそうとしたのですが、途中で足を取られ、そのまま溺れ死んでしまいました。

村人はその行為に怒り、水を含んでぶくぶくに膨らんだ彼女の亡骸を、武器や農具で何十回も突きました。

情けなく死んだその女の代わりに、密かに想いを寄せていた長老の娘が名乗り出て、男と新しく夫婦になりました。

かくして、夫婦は互いの身体に草木で作ったぶかぶかの服や、頭がすっぽり入る、人の顔をかたどった帽子を纏って六尺の大きさになりました。

そして、蛇に食べられやすくするため、己の身体を様々な武器や農具で何十回も突かせ、立派な生け贄となったのです。

生け贄に満足した蛇は何処へと去り、村には平穏が訪れたのでした。

その後、村のために命を捧げた一組の夫婦は「着包様（きぐるみさま）」として村の守り神となり、自己の保身のため逃げだし死んだ女は「着膨（きぶくれ）」として忌みの対象となって、その行いが後世まで伝えられるようになりました。

「着ぐるみ（ぬいぐるみ）の起源について 包村にまつわる伝承」

（昭和5年 村の古老より伝え聞く）

「け、健吾さん、帰ってきませんね……。み、美佳さんも……」

日が暮れても一向に帰ってこない二人を、貢達三人は下駄箱の前で待っていた。

「や、やっぱり、何かあったんじゃ……」

猛は腕を組み考え込んだまま、言葉を発しない。

「せ、せ、先生！ さ、捜しにいきましょうよ！ このままじゃ、大変なことになります！」

貢の思い切った言葉に猛が振り返り、そのまま貢をじっと睨んだ。

「想田……。お前がそんなことを言うとはな」

「ご、ごめんなさい、生意気なこと言ってしまって」

「違うよ、褒めたんだぞ？」

「……え？」

「いつも怯えてばかりのお前が、自分から勇気のある提案をした。しかも普段自身を邪険にするやつを助けるという、成長したな」

「せ、先生……」

「わかったよ、捜しに行こう。南は自分の部屋で待っていてくれ。もし俺達が帰らなかったら、村の人達に報せるんだ」

「私も一緒に行きます」

「ダメだ。二人が戻ってくるかもしれないだろ？ それに、全員行って全員が危険な目に遭ったらどうする？」

「危険な目……？」

「正直言うと、二人の失踪には何か裏がありそうな気がするんだ。ともかく、待ってる。いいね」

「わかりました……」

不安げな表情を浮かべる南を残し、猛と貢は懐中電灯を手に、外へと出て行った。一体、この辺境の小さな村で何が起きているのか。沈みゆく太陽に、南は自身の虞れを投影せずにいられなかった。そうしていると、子供の頃の忌まわしい記憶がよみがえる。

——私を誘拐しようとしたのは、着ぐるみ。そして、今いる場所も、着ぐるみの村。

背後に蠢く因縁を感じ取り、彼女は身震いした。

背中に疼く激しい痛みによって、美佳は意識を取り戻した。

「ぎひっ、うう……」

目を開けるが、相変わらず視界は最悪だ。地面に横になった体を何とか起こそうとするが、痛みと正体不明の痺

れが原因で、思うように動かない。手足を少し動かそうとただけでも、苦手な腕立て伏せを何度も繰り返した時のような筋肉の疲労に襲われ、更なる痛みが加わる。

「いっ……」

それでも、残っている力を振り絞って彼女は立ち上がろうとした。一センチ、二センチ、少しずつ背を浮かしていく。じわりじわりと浸食する痛みのせいで、全身から汗が吹き出て、呼吸はますます荒くなる。

「い……た……い」

おそらくこの行動は、彼女の人生において一番の努力だっただろう。整った顔立ちの美人で、資産家の娘。周りは常にチャホヤしてくれて、困ったことはなんでも親が解決してくれた。困難も障壁も無縁だった自分が今、何故このような状況に陥らなければならなかったのか。汗に混じって、涙が彼女の頬を伝っていく。

長い時間をかけ、ようやく腰から上をまっすぐ立たせることができた。気がつけば、ほんのわずかであるが、痺れも緩和している。立ち上がることこそできないが、四つん這いなら何とか進めそうだった。おぼつかない目の前の光景を頼りに、美佳は手足を板張りの床につけ、ゆっくりと動かしていった。

柔らかい着ぐるみの感触越しでも、何かに触っているのかは理解できた。

（おまえさんは、今から神様になるんだよお）

背中を何かで挟られる前に聞いたこの言葉が、脳内にこだまする。

「やだ、なりたくな、い……」

必死で力を振り絞って少しずつ手足を前に出し、ようやく手の感触が柔らかい地面のそれに変わったその時、どこからか声が聞こえた。

「四つん這いとはやらしいなあ～ 一発いいかい？」

「ひい!？」

自分の口を夫塞いだ、ゲスな着ぐるみ男の声だ。とにかく捕まらないよう、四肢を必死に動かし、逃げた。

「おい、どこいくんだ～？ ぐるぐる回ってるだけだぞお～？これぞ輪姦ってヤツか？」

柔らかい着ぐるみの手が、美佳の臀部に触れる。布越しの卑猥な感触が、ますますパニックを悪化させた。どこでもいい、ここから離れなきゃ！手当たり次第に手足を進め、がむしゃらにもがいた。

「着ぐるみプレイってのもなかなかいいもんだぞお。時間が経てくるとなあ、ふわふわしたもんがぬるぬるしてぐちゃぐちゃになってくんだぞお」

おぞましい声は一向に離れることがない。美佳の思考は益々混乱し、ついには声に鳴らぬ、ガマの断末魔のような叫び声を挙げ、自身を犯そうとする魔手に抵抗しようと試みた。

（やめてっ！ たすけてっ！ ママ！ パパ！ 誰かっ!）

「初めは誰だって嫌なもんさ。慣れ、それが人生でも一番大事だぞ、都会育ちのお嬢様は特になあ」

もはや狼狽しきった彼女は、両手の注意がおろそかになっていた。それゆえ、自らの手が宙に浮かび、そのまま何にも触れなかったことにすら、全く気づくことが出来なかった。

彼女の体は急な斜面から勢いよく転げ落ちた。体を痛めつける激しい回転が終わった直後、その体を冷たい液体が襲った。

(い、息が……できない)

転げ落ちた先は、大人でも膝が浸かるぐらいの川であった。鼻や口に水が流れ込み、悲鳴は全てあぶくとなってしまう。這い上がろうと腕を張ろうとしても、苔に滑って無駄に終わった。ましてや、人体外の材質に包まれた不自由な手では。窒息という更なる苦しみが、彼女を死の悶絶に陥らせる。

(誰でも、いい……た、す、け、て)

濡れた生地に包まれた両手で喉をかきむしるが、苦痛は増すばかり。

(わ、た、しが……なんで……)

やがて美佳はピンと背を弓のように思いっきり反らせたまま、硬直して息絶えた。彼女の絶命の様子を、駐在は側の石に腰掛け、ずっと眺めていた。

「よっしゃ、一丁あがり！」

背後からやってきた人物に気づき、彼は「よう！」と声を掛けた。

「『キブクレ』はこんでええ」



「蛇もOKだぜ、さっき裁いてきた」

「よしよし、残るは後二人、ここからが大事じゃぞ」

「手はずの方はいいんだろうな、婆さん」

ライオンの着ぐるみを身につけたその人物は、こくりと頷いた。

「男の方はしっかり身柄押さえる準備できとるよお。おめえは女の方たのむぞお」

「あの大人しそうな女だな、正直言って好みなんだ」

「分かっていると思うが、犯すなよお。大事な形なんじゃからあ」

「大丈夫だよ、信頼しろよ婆さん」

巡査は腰のホルダーから自慢の拳銃を取り出すと、何とも待ち遠しそうな笑みを浮かべてそれを見つめた。

貢と猛がその無惨な亡骸を発見したのは、それから一時間後のことだった。いなくなった健吾と美佳を探している途中で、川にうつ伏せになった状態で動かなくなった、ぼろぼろの着ぐるみ。その被りものを剥いてみると、窒息の苦悶に顔を歪めた美佳の顔が現れた。その表情は、生前の美貌と大きくかけ離れた醜いものだった。

「ひ、ひどい……。な、なんで……」

「キブクレだ……」

気が動転している貢とは対照的に、猛は冷静に呟いた。

「キ、キブクレ……？」

「傲慢と身勝手の象徴、いわば貧乏神みたいなもんだ。まさか、「着ぐるみ様」をやるつもりか……？」

「な、なんですか。その「着ぐるみ様」って」

「この村に古くからまつわる、呪われた儀式だ。まさか今でも行われているなんて……」

周囲に人の気配がないのを確認した上で、猛は語り始めた。

「この村には言い伝えがあつてな。昔、この村の近くにある沼に大蛇が住み着いて、建物を壊したり、人を食ったりしたんだ。それにたまりかねた村人達はお願いだからやめてくれと懇願するんだが、大蛇は身の丈六尺以上の壮健な男女一組を生け贄として捧げよという。だがな、この村には背丈も小さく身体の弱い者しかいなかった。このままでは村は滅んでしまう。」

そんな時、結婚したばかりの若い夫婦が名乗り出て、こういった」

(草木を編んで詰めた袋を身に纏って大きくなった私達が、生け贄になります)

「そ、それが、着ぐるみ？」

「そう、着ぐるみの発祥――。もっとも学術的な証拠は皆無だが、この村ではそうになっている。だがその途中、女の方は逃げだそうとして、川に落ち溺れ死んだ」

「ま、まるで……！」

「今の美佳と同じ状況だ」

美佳の亡骸が被せられていた被り物を見つめながら、猛は話す。

「死んだ女の代わりに、長老の娘が名乗りを上げ、男の新たな妻となった。そしてそれを纏って大きな男女となった二人を、村人は槍や鎌で八つ裂きにしたんだ」

「な、何故そんな惨いことを…」

「おそらく、蛇の食欲をそそるためだろう。それに、キブクレのように怖じ気付いて逃げ出さないためという意味もあると思う」

残酷な言い伝えに、貢の顔は青くなる。

「ともかく、二人は見事生け贄を全うし、村は救われたと言われている。以来、五十年に一度、この村では儀式を行うことになった。若い一組の男女に、それぞれの性別の人間を大きめにかたどった着ぐるみを着せ、そして……」

「ひ、人身御供に……？」

貢の言葉に、猛は黙って頷いた。

「ひょっとすれば、健吾はまだ助けられるかもしれない、急ぐぞ！」

「は、は、はい！」

笑いながら迫り来る、うさぎの着ぐるみ。

驚いた拍子に、南は夢から覚めた。元々は理科室だった部屋。棚には空っぽのガラス瓶が並べられ、部屋の端には黄ばみで顔が見えなくなった人体模型が壁によりかかるようにして置かれている。

付きまとう憂かない気分を晴らす為、南は部屋の外へと出た。部屋の前の開いていた窓から顔を出し、外の空気を吸う。空を見上げると、すっかり星が瞬いている。都会の薄汚れた紺色ではなく、透き通るような暗黒の夜天。

もしこの場所でなければ。もし、今みたいな大変なことが起こっていなければ、素直に見とれていただろう。皆果たして無事に帰ってくるのだろうか。ひょっとすると、自分一人だけがこの見知らぬ地に取り残されてしまうのではないか。不安が木枯らしのように肩を撫で、彼女の身体を震わせる。

上着をきゅっと狭め、なるべく寒さを抑えようとした時、ふと、校門に目がいった。ぼんやりと丸い光が入ってくる。

(先生と貢さんが帰ってきたのかしら?)

いや、その考えを即座に否定した。それなら、光は二つあるはずだ。嫌な予感がした彼女は、じっと息を潜め様子を伺う。

光の持ち主は入り口の前まで来たところで一旦立ち止まり、腰に下げた何かを取り出した。距離があってはっきりとは見えないが、懐中電灯の光にぼんやりとその形状が映し出される。

それを見ていた彼女の頭に、自ずとイメージが浮かんだ。拳銃だ。それが判ると同時に、胸中の悪寒は最大限に増幅した。そして一目散に、彼女は部屋の中へと駆け込んだ。

漏れたライトの光に照らされ黒光する拳銃をまじまじと眺め、駐在はこれから起こる快事を想像し、胸躍らせていた。大丈夫だよ、生け捕りにはするさ、生け捕りにはな……。たらりと流れた涎を慌てて拭き取った後、彼は校舎へと足を踏み入れた。

「吉川さん、いますかねー？」

声を掛けてみるが、返答はない。やはり、感づかれているか。こんだけコトが起こってるんだから、当然だな。

あまり力をかけないように歩いているつもりだが、やはり建物が古いせいか、どうしてもきしんだ音が響いてしまう。

まあいいや、確か理科室に泊まってるらしいな。駐在はいつでも撃てるように銃を構え、ゆっくりと廊下を進んだ。

見つけたらどうするか？ 当然、やるのさ。さっきの溺れ死んだ女も惜しかったかもしれないが、若いだけで好みじゃねえ。一見まぐわいとは無縁そうな、大人しい女の方が俺は好きなのさ。どうせ死ぬんだ、一発ぐらいヤッても文句はねえさ。しっぽりしなきヤストレスが溜まるってんだよ。

理科室の看板が見えた時、ライトの調子が悪いのに気がついた。年代物の赤い懐中電灯は、カチカチと臙気な点滅を繰り返した後、とうとう点かなくなってしまった。

電池切れか。替えの電池を持ってくりゃよかったと思ったが、大きなアクシデントではない。この仕事柄、夜に動くことは慣れている。真っ暗な中でも、何か分かる程度に物を見ることはできる。少なくとも、都会育ちの連中よりは利いてるさ。

そっと息を殺しながら扉を開け、待ち伏せがないか確かめた後、蒼い闇に覆われた室内に足を踏み入れた。そして間もなくして、獲物の姿を捉えた。窓にかけられたおんぼろの黒いカーテン。

その下から、足が伸びている。

予想以上の浅はかさに駐在は思わず吹き出しそうになった。都会の人間ってのはジャンクフードの食い過ぎでバカになってる。数年前、卒中で死んだ親父はしょっちゅう言ってたが、どうやら事実らしい。

どうしてやるか？ アホらしくくるまってる所を撃ち殺してやるか？いや、殺すなと言われてる。楽しみも無くなっちゃうしな。気づかないふりして周りを探して、そんで徐々に近づいて、一気に銃を突きつける、それでいいだろう。後はたっぷりやってやる。

彼はあたかも周囲を探し回るフリをした。なるべく、カーテンの膨らみに目をやらないようにして。そうして次第に距離を詰めていった。

よほど緊張しているのか、ピクリとも動かない。気づかれまいとしているのか、それとも半ば諦め、怯えているのか。

なに、女一人が自棄になってかかってこようが、力には自信がある。ねじ伏せて、そのまま服でも剥いでぶち込んでやる。

いよいよ、すぐ側までやってきた。右側の机を調べるふりをしてしながら、足を一步一步そちらにやる。やがて、十分に近づいたと判断し、思いっきりそこへと飛びつき、銃を突きつけた。だが、その感触は、彼の予想とは大きく違っていた。

啞然としている駐在の背中へ、南は思いっきりぶつかった。不意を突かれ、狼狽する彼の右腕を、ぐっと掴む。

勢い余って開かれたカーテンの内側には、人体模型が置かれていた。村人の襲撃を見越した南は、咄嗟にこの人体模型を囮にし、逆に迎え撃つべく待ち伏せをしていたのだ。

「このアマがっ！」

ある程度自由の利く左腕でがむしゃらに肘うちを食らわせるが、南はひるまない。銃を持っている右腕を離すまいと、むしろどんどん力を増していく。

駐在の肘が目当たり、一瞬視界が見えなくなるぐらいの痛みを覚えたが、そんなことで諦めるわけにいかない。もしここで吹き飛ばされたら、それは死に直結する。

「やめろっていったんだこのメスがよお！　しまいにゃこれで撃ち殺すぞこらあ」

喚き散らしながら、駐在は身体全体を左右にぶんぶんと振り回す。

「きゃあっ！」

か弱い女性の体力ではさすがについていけないのか、右手にこもった力が弱まる。だが、まだ残った何本かの指が、必死にしがみついてくる。

駐在のふかふかな右指、そして左指がその細い手指を握りつぶそうとするが、なかなか上手くいかず、双方譲らない。やがて、銃口が南の方を向いた。

「このままぶっ放してやる！」

今がチャンスとばかりに、ほどけた指をトリガーにかけた。だが、撃たれまいとする南の左腕が、彼の右腕にぶつかった。

一発の銃声が、校内に響いた。南はその轟音に対して咄嗟に顔を背けたが、やがて自分がその犠牲にならなかったことに気がつく、恐る恐る駐在の方を見る。

彼は立ち尽くしたまま、ピクリとも動かなかった。そのぶち柄の顔は、何一つ変わらず笑顔をかべている。だがその身体、心臓の部分にはぽっかりと不格好な穴が開き、うっすらと血が滲んでいた。やがて彼は壁にもたれ掛かったまま、ずずずっとその場に倒れ込み、そのまま動かなくなった。



南が危機に陥っている最中、貢と猛は村にただ一つの宗教施設「包神社」へと向かっていた。その道中には古びて形が崩れ、おぞましい形相となった着ぐるみ達がまるで地蔵のように祀られており、それが夜になると一層不気味さを醸し出している。

「村の人間達が使っていた着ぐるみさ。持ち主が死ぬと、人間の墓とは別にこうやって祀られるんだ」

啞然として着ぐるみの列を見ていた貢に、猛がいった。

「この中には俺の家族もいる。いずれは俺もここに並ぶのかもな」

「じゃ、じゃ、じゃあ、先生も着ぐるみを!？」

「そんなに怖がるなよ。俺はこの通り、大学で教鞭をとってる、今までお前等の前に着ぐるみ姿で現れたことがあるか？ いくら故郷だったって、狂った村人の味方はしないよ」

「で、で、ですよ、す、すいません」

いつも通りの穏やかな返答に、貢は安心した。

無限に続くかと思われるぐらいの抜け殻達の行列とすれ違い、やがて大きな建物が見えてきた。こうごうと燃えさかる篝火によって、そこは夜にも関わらず非常に明るかった。木材の痛み具合、所々にできた染みなどから、かなり年代を経た建物であるということはすぐに分かる。

能の舞台のようなその場所は非常に広く、村人何十人がごった返してもまだ余裕があるのではないかと思われた。この照らされた壁には、江戸時代の獅子や象をかたどった着ぐるみが、狸やうさぎの着ぐるみと仲睦まじそうに戯れている絵が描かれていたが、それに混じって、おぞましいものもあった。

嫌にぶくぶくとした男女が、着ぐるみ達の持つ刀や鎌、その他様々な農具によって串刺しにされ、夥しい量の血を流しながらのたうち回っている様子が、他の可愛げある絵と同じ調子で描かれていた。

「これが着ぐるみ様の儀式さ。着ぐるみに包まれた生け贄は意識のあるまま滅多刺しにされ、炎の中に捧げられる。まさか、今でも行われていたなんて……」

「ひ、ひどい……」

「ほう、村のしきたりを愚弄するか」

貢がはっと振り返ると、栄が立っていた。最初に素顔を見た時、もう腰が曲がっていてもおかしくないような年齢を感じさせたが、今の彼女はとんがらし大王の着ぐるみに身を包み、二人の前に立ちはだかっている。

「まあ、都会のものには分らんだろう。実際に体験してみれば、その偉大さが分かるというもの」

「な、な、何を言ってるんだ!？」

「お主は着ぐるみ様の男形となるんじゃ、光栄に思えよ」

「そ、そんなものには、ならない!」

今まで誰にも見せたことのない、強い反抗心の籠もった表情を貢は浮かべた。

「け、健吾さんはどうした! 健吾さんを返せ!」

着ぐるみの中の老婆は嘲るように笑いながら、黙って右を指さす。その方向、祭壇からやや外れた所に置かれた灯籠の下、健吾の亡骸が力なく横たわっていた。

「その汚らしい都会ものも、立派な役目を果たすんじゃ」

「貴様あ！」

貢は大声を張り上げ、栄に向かっていった。そしてそのまま、彼女を怒りのままに殴りつける――  
と、本人は願っていた。

だが、その願望とは裏腹に、彼の身体は地面に向かってうつ伏せに倒れていった。何が起きているのかすら分からぬまま、右腕がねじられ、強烈な痛みが流れる。そしてその後、すぐさま腹部に打ち込まれた強い衝撃により、彼の眼前は暗闇に包まれた。

「相田、起きろよ、相田」

猛の声に気づいて、貢は我に返った。

――また、ミーティング中に眠ってしまったのだろうか。いけない、また健吾さんに怒られてしまう――

焦りとともに目を開くと、大きなピンク色の兎が自身の顔をのぞき込んでいた。驚いて叫ぼうとしたが、声が出ない。目は動かせるのに、口は1ミリ動かすのがやっとの状態だ。

「俺だよ、相田。お前の先生、縫原猛さ」

聞き覚えのある声で、夢うつつから覚めた。そして、今まで起きたすべての出来事を思い出し、憎しみをたぎらせた。

「そんな怖い顔で見るなよお。ウソついたのは悪いけどさあ、俺、この村の人間なんだぜ？ 故郷の為に行動するのは当然だろ？」

「ほら」と猛は手に持った被り物を見せた。死んだ美佳が被っていたものとよく似ているが、こちらは表情が勇ましい。おそらく、これが着ぐるみ様の「男形」なのだろう。

「今からお前はこれを被って、着ぐるみ様になるんだぞ。南は女形、ずっと一緒になれるんだ！ 嬉しいだろ！？」

貢の心の中で憎悪がますます燃え上がるが、もはや動けない身体ではどうしようもなかった。

「嬉しいよなあ。お前、吉川のこと好きだったもんなあ。二人で一緒に血まみれになるんだ。これって究極の愛じゃないか？ なぁんてな」

一通りべらべらと喋った後、猛は貢の頭に先ほどの被り物を無理矢理はめた。貢は中からふーふーと息を吹いて、精一杯の抵抗の意志を示すが、全く効果がない。

「しびれ薬がなけりゃ、今頃俺を殴りたいんだろうなあ。まあ、時間が経ってお前が死ぬ頃にゃ解けるよ、ぎゃはは！」

着ぐるみ越しに悪辣な馬鹿笑いをしながら、猛は貢を乱暴な手つきでうつ伏せにする。頭が木板にぶつかり痛みが走ったが、それを意志表示することすらできない。「自身が情けない」臆病者の彼は、その人生において何度もそう感じたことがある。だが、この状況下において、今までのそれよりも遙かに大きな自責の念を抱いた。

吉川南。入学式で一目見た時から、運命的な何かを感じていた。はっきりとよくは分からないが、他の女性にはない、貢にとって大事な何かを、彼女は有していると確信した。だから彼は、彼女と同じ民俗学サークルに入った。自己中心的な美佳や粗暴な健吾のふるまいに耐えてこられたのも、すべて南がすぐそばにいるからだった。

そして昨日の夜「あなたを守る」と、彼女に告げた。胸中に抱えている大きな塊の、ほんの一片。それを告白したにすぎないが、彼にとっては大きな進歩であり、また、それまで虚無に近かった彼の人生において初めて大きな目標がはっきり確立された瞬間だった。

なのに。それにも関わらず、自分はこうして無力さをさらけ出し、ニヤついたうさぎの着ぐるみをきた裏切者に、いいように扱われながら、言葉の一つも返すことができない。

「お前、自分のこと嫌いだろ？」

そんな彼の心を見透かすように、うさぎは言った。

「分かるぞ。俺がお前のこと嫌いなんだからよ。うじうじして、はっきりしやがらねえ。はっきり言わせてもらおうと、蛆虫みてえに思ったよ」

繊維質に包まれた猛の手が、貢の背中に触れる。その瞬間、貢は自身の背中の一部がむき出しになっていることに気がついた。そしてそこに、どろどろの液体が流し込まれはじめた。鈍い銅色をしたその液体が入った器を傾けながら、猛は語る。

「これはな、この地方に自生してる大変珍しいマツの一種なんだ。こいつの樹液は熱と反応すると、強力な接着剤になる。重機でも持って来なきゃ剥がれないぐらいの、丈夫なやつにな」

バルブが回される音の後、シューッ、と、気体が吹き出る音が聞こえてきた。貢はその方向に目を向けたかったが、叶わない。ガス溶接用のバーナーを、猛は着ぐるみ越の分厚い手で器用に調節していた。

「喜べよ相田。お前は今から神様になるんだ。社会に不必要ないじめられっかが、皆から崇められる存在になるんだぜ？ 嬉しいだろ」

(やめろ！ やめてくれえ！)

徐々に近づいてくる熱気に対して、貢は恐怖し、心の中で必死に叫んだ。だが残酷にも、バーナーから噴出される鮮やかな火は、彼の背中を熱でいたぶり、塗りたくられた樹脂と強制的に融合させていく。

(あああああああ！)

とてつもない激痛で、貢の両目は端から端へ、何十回も往復する。この激しい苦しみを表現できないことが、余計に彼の感覚を追いつめた。

「痛いだろう！ 苦しいだろう！ でも我慢しろよ！ 注射みたいなもんさあ！」

被り物の内側から、けたたましい笑い声が響いた。

「おらあ、えらいきんちょうすっぞお」

松明を片手に、ペンギンの着ぐるみが言った。

「まったくじゃあ。五十年に一度っちゅうから、わしもはじめて見るわ。どんなすごいもんじやろ」

竹割用の鉈を手にした乳牛の着ぐるみが言葉を返す。

「去年死んだ作造じいさんは見たことあるっちゅうとったよ。ばあさまが祝詞を挙げた後、男と女の着ぐるみ様に向かって皆で滅多刺しにするんじゃあ」

すっかり錆びた草刈り鎌を手に、腰の曲がったかばの着ぐるみが会話に加わる。

「いくら村のためとはいえ、少々おっかないもんやお」

「なあに、形になるのは都会もんじゃ。平気じゃ平気」

ペンギンの言葉に、かばは表情一つ変えず、うんうんと頷いた。

「あいつらは経済や政治やらえらそうなことばかり言いよて、えらいわがママやからのお。少しはこうして減らした方がええんよ」

その通り、とペンギンが声を大にした。

「鹿やイノシシやって増えすぎたらあかんから、鉄砲で数を減らすじゃあろう？ それと同じやて」

「やつらの生み出したギジツは有り難く使わせてもらっちょる。それが供養の代わりやあ。ぼたん鍋や鹿肉食うのと同じやて」

「なるほど、それやったらええことやあ」

村人二人の言葉に乳牛は納得したとみえて、いくつもの乳首がついた腹をポンと叩いた。

「しかし、松明をずっと上げながら歩くのもしんどい。ヨシよ、ちょっと変わっとくれ」

ペンギンがおもむろに松明を近づけてきたので、乳牛は焦った。

「わわっ！ あんまり近づけるな。生地をふりいすにしたんを忘れたか」

「あらっそうだった。いかんいかん」

まったくモウ、などとぶつくさ言いながら乳牛は松明を受け取り、先を照らした。すると、向こうから一匹の着ぐるみがやってきたのに気がついた。警官帽を被った、ぶち柄の犬。

「あら、駐在どんではねえか」

一番最初に乳牛が気づき、声をかけた。続いてペンギンが駆け寄る。

「形集めの役を仰せつかったそうじゃのう。ご苦労なこってご苦労なこって」

ぶち犬は何も答えず、ただコクリとだけ頷いた。それを見て、カバが訝しがる。

「なんじゃらお前。いつもはようさん喋るのに、風邪でも引いたか」

ぶち犬は再び、コクリと頷いた。ペンギンがポンとその背中を叩く。

「そりゃお前、夜中にあんだけ飲んだ後やのに外おったら、風邪でも引かん方がおかしいわ。駐在所戻ってゆっくりせえ」

その言葉にぶち犬が押し黙っていると、向こうからもう一人着ぐるみがやってきて、三人に声を掛けてきた。

「皆さん、何をしとるんですか。もうすぐ着ぐるみ様が始まりますよ」

ぶち犬は何か気づいたのか、ハッと声の方へと振り向いた。ピンク色のうさぎが、にっこりとした笑顔でこちらへと歩いてくる。



「おお、せがれ！ 父親譲りの着ぐるみ、よう似合いますなあ」

「ははは、俺も久しぶりに着たもんで、上手く着こなせてますかねえ」

「いや、なかなかの男っぷり。それでこの包み村の次期村長！」

うさぎを褒め称える他の着ぐるみ達を、ぶち犬は呆然と眺めていた。

「では皆さん、祭壇の方へ行きましょう」

「おお、そうじゃそうじゃ」

「五十年に一度の儀式、すごいもんになるじゃのう！」

「ほら、駐在さん、どうしたんですか？ 早く」

うさぎに呼ばれ、ぶち犬は急いで四人の後へとついていった。

――外の寒さを遮断する柔らかな生地に包まれて、南は考えていた。今にも叫びだして、この四人の着ぐるみ達を突き飛ばして逃げてしまいたいぐらい、恐ろしい。このまま行けば、どうなるか分からない。つまり、自分は殺されるかもしれないのだ。

だから、最初は逃げようと思っていた。はぎ取ったぶち犬の着ぐるみで駐在になりすまし、その隙を突いて村の外に出ようとしていた。

だが、できなかった。貢や猛を見捨てて、自分一人だけ逃げるなどというのは、良心が許さなかった。

（自分がずっと一緒にいます！　だ、だから安心して！）

同い年の異性から、こんなに暖かくて頼もしい言葉をかけられたことは、今までになかった。そんな優しい人を、置き去りにすることなんてできない。

そして、ついさっき遭遇した出来事が、彼女をあえて危険な道へと進ませた。突然現れた、ピンク色したうさぎの着ぐるみ。彼女の心の奥底にトラウマとして刻まれている、あの忌まわしい着ぐるみと同じ。更に、そいつの発した、聞き覚えのある声。必ずしもそうだとは言いきれないが、もし自分の察した通りの人物が着ぐるみの正体だとすれば、貢は……？

彼女は、自身のか弱さを省みず、村人達に紛れて忌まわしい場所へと向かう決意を固めた。大切な人を、救うために。

包神社には、既にたくさんの着ぐるみ達が集まっていた。パンダ、ゴリラ、ワニ、リス、シカ、キリン。一つ目小僧に傘化け、赤鬼青鬼。年代を感じさせるデザインから、つい最近作られたと思われるものまで、古今東西のあらゆる着ぐるみがそれぞれ鎌、斧等の凶器や火のついた松明を持って、祭壇の前に揃っていた。

「皆さん！ この大事な儀式に、よくぞ参加してくださいました。村の代表として、祖母とともにお礼を言わせていただきます」

うさぎ着ぐるみの言葉に、他の着ぐるみ達はわあっと歓声を上げた。

「さあ、駐在さん、祭壇へ上がりましょう。あなたも功労者ですからね」

うさぎに手を引かれ、ぶち犬を身に纏った南は祭壇へと上がらされた。そこにはとんがらし大王、栄が立っていた。

「ようきた、わが孫よ。息子に似て立派になったもんじゃ」

その囁れた声が、若干潤んでいる。着ぐるみの中で涙ぐんでいるのだろう。

「おばあちゃん、その言葉嬉しく思います。この儀式を司ることができたこと、父も草葉の陰で喜んでますよ」

「うむ、ではまずキブクレを」

うさぎはコクリと頷くと、なにやら大きな物体にかけられた、鮮やかな紫の布を勢いよく剥がし取る。

それを見て、思わず南は声を上げそうになった人間を下手くそにかたどった着ぐるみが、水に濡れてぶよぶよに垂れて、すさまじい悪臭を放っている。

「キブクレだあ！」

「突けえ！ 突けえ！」

「厄を追い払え！」

うさぎはその笑顔を崩すことなく「キブクレ」を抱え、狂乱する村人に向かって放り投げた。愛らしい着ぐるみ達は野太い叫び声を上げ、手にした得物でそのおぞましい物体を散々にいたぶった。湿った布から黒い血液が流れだし、動物達の体を染め上げていく。

南は着ぐるみのつぶらな瞳越しにその光景を目撃し、戦慄した。ぼろぼろに引き裂かれた肉の切れ端所々に、美佳が身につけていた衣服やアクセサリーが見え隠れしている。間もなく、自分も同じ結末を辿るのではないだろうか。

狂乱の虐殺が終わり、舞台は凄まじい熱気に包まれていた。むせかえる血の臭いが、村人達の本能を蘇らせ、甲高い絶叫を上げさせる。

「うむ。では、着ぐるみ様とお蛇様の方を……」

うさぎはコクリと頷くと、なにやら大きな物体にかけられた、鮮やかな紫の布を勢いよく剥がし取る。上等の漆で装飾された儼かな台の上には、着ぐるみが二つ。おどろおどろしい鱗柄の布に包まれ、ポカリと口を開けている健吾の死体。その身体には、両腕が見えなかった。

だが、真に南を戦慄させたのは、その後ろに控えていたものだ。着ぐるみ様、すなわち貢がぐったりとした姿勢で祀られていた。最初はその着ぐるみの異様な風貌そのものに恐怖した南であったが、まもなくしてその中身の正体を感じ、改めて愕然とした。

「着ぐるみ様じゃ！ 着ぐるみ様じゃあ！」

「ああ、ありがたや！ ありがたや！」

ぐったりした着ぐるみ様の姿を前にして、着ぐるみ達は熱狂し、けたたましく声を上げた。だが「静まれ！」という栄の一括で、すぐさま黙りこくった。かばの着ぐるみを着た年寄りは何かに気づいたようで、栄に対して率直な疑問をぶつけた。

「なんか、話に聞いたとは少し違うような気がするやあ、おばば」

「その通り、着ぐるみ様は本来男と女の二人組。今のままでは女形が足りん」

その回答に、他の村人達も口々に喋りはじめた。

「それやあ儀式にならんじゃないか」

「どうしたことやあ、おばば！」

「儀式をおろそかにするのか？」

再び一帯はやかましくなったが、更に大きな老婆の怒号で、すぐさま静まりかえった。

「慌てるでないわ！ 女形はそら、そこにおる」

その指差した先には、ぶち犬がいた。

「そ、そりゃ駐在やあねえのかい！？」

「違う！ あの者は既に亡き者となっておる！

この着ぐるみの中にいるのは、真っ赤な偽者！」

「おお、なんと！」

突然のことに、南は立ち尽くしていた。その様を見て、うさぎが嘲るように笑った。

「最初から分かってんだよ。そのバッジの位置、ズレてるぜ？」



ぶち犬の胸に付けられた、おもちゃのような警官バッジ。その位置がやや傾いていて、かなり注意しなければ分からないような、黒い穴がわずかに覗いていた。

「それ、弾痕だろ？ あの駐在を撃ち殺した時の。

なあ、もう観念しろよ、南」

南はしばらく黙り込んでいたが、やがて静かに被りものを取り、その素顔を見せた。

「……あんたがそんなやつだと思わなかったわ、先生」

「ほう、分かっていたか」

南の言葉に、うさぎはいかにも余裕綽々な手つきで、同じく被り物を取った。露わになったその素顔は、悪辣な笑みを浮かべていた。

「見覚えがないかな？ この着ぐるみに。忘れるはずなんてないと思うがなあ」

「ま、まさか……！？」

更なる衝撃が南を襲った。自身の記憶に焼き付いて離れない、恐るべき悪魔、あの着ぐるみ。そう、幼い自分を襲ったのは、ピンク色のうさぎだった……。

「俺の親父はな、お前のせいでサツに逮捕されたんだよ！」

「そんな！？」

「俺だって全く気づかなかったよ。だがな、この前お前の昔話を聞いて確信した。ラッキーだよ、これも運命ってやつだろうな。親父はな、ムシヨで自殺したよ。おかしいよな？ たかが都会のガキを一人やろうとしただけで死なせられたんだ。しかも未遂だぜ？ どう思うよ、え？」

「何を言ってるの！？ あなたには倫理ってものがないの！？」

「都会もんが決めた理屈なんぞ知るかよ。さあ、覚悟を決めろ。お前は今から神様になれるんだ」

腕を掴もうとした猛の手を払いのけ、南は腰のホルダーから拳銃を取り出した。あの駐在から着ぐるみと共に奪い取ったものだ。

だが、猛の余裕は崩れない。栄もまた、震えながら銃を向ける南を見て、にんまりと勝利を確信していた。

「やめときな。銃ってのは案外扱いが難しいんだ。素人はこんなに近似的に当てるのすら無理っでもんだ」

「それに小娘、周りが見えっか？ こんなに大勢の村人に囲まれとる。万が一、わしらに銃を当てられたからといってお主は生きて出られんぞ、無駄なことじゃらあ」

「うう……」

「さあ、娘は娘らしく、大人しくしい。大丈夫じゃあ、痛みはするが素晴らしい地位と引き換えじゃ」

「嫌よ！」

南が尻込みした隙を見て、猛が飛びかかった。南は咄嗟に発砲しようとしたが、その引き金は思った以上に固く、撃てないまま猛の手によってはたき落とされてしまった。

「いい匂いだ、親父の気持ちが分かるよ」

「いやあ！ 放して！」

南は必死に抵抗するが、抱きつく男の両手をふりほどくにはあまりにも力がなかった。



「よし、この場で女形に込めるゆえ、はよ薬を飲ませよお」

栄は黄色い液体の入った小瓶を手に、一步一步南に近づいていく。猛は己の宿願の完遂を確信した。過疎によって廃れていく村を、儀式の達成によって救うこと。そして、無惨にも死へ追いつめられた父親の仇討ち。それらが一変に果たされる、これほど爽快なことがあるか。もがく南の頭を掴む手に力を込め、動けないようにする。そして嫌がるその口に、しびれ薬が注ぎ込まれん時……。

何者かが突然、二人を突き飛ばした。その隙を突き、南は猛の魔手から逃れたが、体勢を崩した栄は薬を自分の顔に浴び、叫び声を上げ慌てふためきだした。そしてその身体を必死に両手で掴む、異形の着ぐるみ。

「貢さん！」

不細工な男形へと変身させられた貢が、自由に動かぬ身体に鞭打ち、栄を人質に取ることに成功したのだ。

「う、動くな！ お、お前の母親がどうなってもいいのか……！」

猛は少しばかり面食らったそぶりを見せた。だがしかし、その左手はすぐ側にあった宝剣に伸びていた。

「貢さん！ 危ない」

南が叫ぶも、遅かった。猛の剣は、実の祖母である栄諸共貢を串刺しにした。

「村のためだ、ごめんよばあちゃん……」

「猛よ、よくやったぞ……！それでこそこの包村の代表……！」

ドス黒い血を大量に吐きながら、栄が狂ったように叫ぶ。男形の身体がガクガクと震え、口元が赤黒く染まり、そして広がっていく。

村人達が喚き散らし、舞台は狂乱に包まれる。

「かかれ！ 都会もんを殺しゃあ！」

凶器を持った着ぐるみ達が、祭壇へと押し寄せた。

「貢さん！」

「南さん、逃げて……」

起きあがろうとする南の右手に、固いものがぶつかった。拳銃であった。

猛が振り向く。その顔は血に染まり、人を食らった鬼のよう。

南は怖じ気付くことなく、冷静に銃を向け、そしてやってくる猛めがけて発砲した。轟音が夜の空に響き、猛の左足がものすごい勢いで宙に浮いた。

「ぎゃあっ！」

腿を撃たれ、バランスを崩した猛が倒れ込んだ先には、めらめらと燃え上がる篝火。

それはそのまま村人の着ぐるみに倒れ込み、瞬く間に引火した。燃えやすい素材で作られた着ぐるみを着ていたことが命取りとなった。火だるまと化した村人はその苦しみのためもがき、そして炎は周囲の人物にも容赦なく襲いかかった。断末魔のうめき声を上げ、愛らしい表情を浮かべたまま炎上する着ぐるみ達。ある者は死体に囲まれ身動きできぬまま焼死し、またある者は悲痛を和らげる為、周囲の木々に頭を何度も打ち付けながら力尽きていった。そこから生み出される繊維と死の臭いが、その場を更なる地獄絵図へと変貌させていく。

「貢さん！ しっかりして！」

醜く息絶えた栄の屍をどかせ、南は貢に駆け寄った。だが、その息は弱く、呼吸をする度陰惨な血の息吹が彼女の顔に当たった。

「み、南さん、これ……」

貢が手を奮わせながら彼女の手握らせたもの、それは車のキーだった。

「南さん、い、い、生きて、く、下さい……。元気でいて、下さい……」

被りものと血塊に阻まれたその声は、もはや彼の死期が間近に迫っていることを明らかにした。それでも諦めきれず、南は何とか彼を立たせ、共にこの場から逃げようとした。

「南さん、危ない！」

彼女の背後に迫っていた火だるまの山羊に向かって、貢はおもむろに飛び込んだ。そして紅の火炎は瞬く間に彼の体へと移り、全身を大きな炎が包んだ。

「貢さん！」

彼を救おうとした南は、焼けただれる着ぐるみから垣間見えた今にも消し炭になりそうな眼球と目が合った。このような状況だというのに、その目線は悟りきっているかの如く穏やかであった。

彼女は死にゆく貢に背を向け、急いで駆けた。悲しさが胸中を包んだが、涙は流れない。

真っ暗な道を、急激な坂を、南は必死に走った。着ぐるみを纏った状態では極めて走りづらく、途中で何度もバランスを崩しそうになったが、それでも転倒せぬよう、命がけで踏ん張った。

すぐ後ろから、苦しみに満ちた着ぐるみどもの声が追いかけてきているのだ。もし立ち止まるようなことがあれば、それは即ち死。亡者に抱きつかれ、ともに火だるまとなって残酷な死を迎えるのみ。同じサークルのメンバーであった、他の三人のように。

被り物を取ったことが幸いして、息切れは今のところ起こしてはいないが、心臓が破れそうなくらい痛い。車の停めてある宿泊所を目指し、南はがむしゃらに足を動かす。この村で初めて夜を迎えた時、美しいと感じた様々な景色が、あっという間に視界を通り過ぎて行く。貢と二人で話をした、あの時のことが頭に浮かぶ。今の自分と当時の自分、短い間の出来事なのに、まるで別人が体験したことのように感じられた。

長い間走り続け、宿泊施設が姿を見せた。ひょっとして、車がないのでは？そんな不安が頭の中を巡ったが、その心配は杞憂であった。猛が運転してきたワゴン車は、四隅にドラム缶が置かれただけの粗末な駐車場に停車されていた。すがりつくように運転席の扉を掴み、鍵を差し込もうとするが、着ぐるみ越しゆえなかなか上手くいかない。そうしている間にも、彼女を追う亡者達の声は近づいてくる。途中で力尽きたのか、明らかに人数は少なくなっているが、その分より恨みと憎しみの募った叫びが響いてくる。

ようやく、扉が開いた。急いで乗り込み、エンジンをかけようとする。が、上手くいかない。

「かかって……かかってよお！」

空しい駆動音の不発が、何度も繰り返される。

前方から、紅い塊がやってくるのが見えた。言うまでもない、村人達である。体中を焼かれている間、着ぐるみと生身が融合したのか、もはや独特なクリーチャーのようなおぞましい姿をした者達が、苦悶の叫びを挙げながら、車へと近づいてくる。何人かはたどり着くことすらできず、その場に倒れ込んでそのまま動かなくなったが、3匹の怪物達がボンネットへと張り付き、無理矢理こじ開けようと試みだした。自らの体をいたぶる炎をエンジンに引火させ、南諸共消し炭にしようと考えているのだろう。

「来るなあ！ 来るなあ！！」

今まで一度たりとも挙げたことのないような、とてつもない怒りと焦りが彼女の口から発せられる。だが、エンジンはかからない。

全身の毛をむしられたペンギンの丸焼きのような怪物が力尽き倒れた後、右手が焼けただれた犬が最期の力を振り絞り、ボンネットをわずかにこじ開けた。やがて、駆動部にその燃えさかる手が伸ばされんとしたその時――。

「やめてええ！」

最期のエンジンスタートが成功し、車体が激しく揺れ始めた。躊躇することなく、そのままアクセルを踏んだ。怪物達は凄まじい勢いで吹き飛ばされ、地面を激しくころ転がっていく。

村の入り口に向かって、南は猛スピードで車を走らせる。かすかに自分を追ってくる声が聞こえてくるが、もう追いつかれそうにはない。

ぐらぐらした不安定な道を乗り越えると、やがて二日前に通った林道が見えてきた。もう、声は聞こえてこない。それまでの緊張が一気に解かれ、この上ない安心が南を包んだ。

自分は助かったんだ……！ 狂人の集団から、ただ一人逃れることができたんだ……！

暗い道を走らせていると、自動車のハイビームが何かを照らした。有名なアニメをもじったキャラクターが牧場の宣伝をしている看板が映し出されていた。ここを通った時、健吾がバカにしたあの看板……。貢に似て、不細工だと言っていた……。それを聞いて、美佳も意地悪に笑っていた。でも、皆もういないんだ……。全く意識してないのに、ぼろぼろと涙が零れ出し、口元がひきつってくる。南は、夜の林道で、一人泣いた。

翌朝、付近の駐在所にたどり着いた南の通報によって、包み村の一斉捜索が行われた。村へと入った捜査員を待ち受けていたのは、所々に残された異様な風習の跡、そして着ぐるみ達の焼死体であった。

この奇っ怪かつ凄惨な猟奇事件は、たちまち世間の注目の的となった。現代日本において、このような信じられない事件が起きたという事実は、丁度流行していた田舎暮らしブームを吹き飛ばす程の力を持ち、皮肉にも地方の過疎化を加速させる要因の一つとなってしまった。とあるサブカル系の映画監督はこの事件を映像化しようとし、周囲からの猛烈な批判を浴びた。

だが、当の吉川南本人は、この事件について何らコメントをすることはなかった。記者団だけではなく、あらゆるメディアからの取材や出演要請を、彼女は一切受けず、ただただ沈黙を守り続けた。世間にとっては好奇心を満たす格好のイベントかもしれないが、彼女にとっては大きな災いである。それを振り返るなど、出来るわけがなかった。南は大学を中退して実家へと戻り、クリニックでの治療とスーパーのレジ打ちをしながらひっそりとした日々を送り続けていた。



バイトの帰り、夕飯の食材が入ったビニール袋を手に商店街を歩いていた彼女の耳に、脳天気な歌が聞こえてきた。

自分がいつも通っている道で、着ぐるみが風船を配っている。最近流行りのキャラクターらしい。歌は側に置かれたラジカセから流れてきている。

思わず、腰が引けた。あれ以来、着ぐるみが以前にも増して怖くなった。実際に見るだけでなく、テレビの映像が目につくだけでも、寒気がする。

別の道を通って行こう。そう思って着ぐるみから目を背けた時、貢の顔がフラッシュバックした。最期に彼が見せた、穏やかな瞳。その意味が、未だに理解できない。いや、理解できるが、受け入れられないのかもしれない。おそらく、彼に対して感じた唯一の想い、抱ける人はもう現れないだろう。でも、彼は私をどう思っていたのだろう。どのような私を見て、あのような表情を見せたのだろう。

なんとなく、足が前に動いた。着ぐるみは彼女に気がつくことなく、寄ってきた子供達とじゃれている。恐れはある。でも、恐れたままじゃ駄目だ。その勇気が、彼女を前に進ませる。

着ぐるみとすれ違いそうになった時、何かが目の前にニュッと突き出された。ハッとしてそれを見ると、風船の紐だった。着ぐるみが赤い風船を持って首を傾げている。これを受け取れということらしい。

やや戸惑ったが、南はそれを受け取り、そして再び歩きはじめた。それまで抱いていた黒いもやのようなモノが、若干ではあるが薄まった気がして、体が軽くなった。今までの悲しい記憶からなる負の感情が、少しだけだが和らいだ気がした。

上を向いて歩く彼女の後ろ姿を、着ぐるみはじっと見つめていた。

風船欲しさによって来る子供を、彼は手で強引に払いのけた。最初子供は不満そうな表情を浮かべたが、先ほどとは明らかに異なる彼の様子に怯え、すぐさま逃げ出した。

しばらくして、着ぐるみはゆっくりと歩き出す。満足に動かせない左足を引きずりながら。周囲を見ると、どこから現れたのか、たくさんの着ぐるみ達が共に歩いてくれていた。彼を置いていかないよう、歩調を合わせながら。

ブタ、マングース、トカゲ、カマキリ、ヘビ。思わず感極まり、ピンクの兎は両手を前に出し、だらんと下げると、彼らもすぐさま同じ動作でそれに応えた。村の者、土地亡き後も志は有。志は常に一つ。討つべき者はただ一人。

(完)